

町民文芸



只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一 指導

小倉キミ子

うかうかと過ごせし雨の一日の何とはなしに後ろめたしも

関谷登美子

団地で観音像を巡り来ぬ清しき面輪に心洗はる

古川 英子

大雪の止みたる夜半に冴えわたる満月見むと半纏羽織る

目黒 富子

落雪の立札の側を入々ら会釈のみして足ばやに過ぐ

馬場 八智

凍み解けの道恐れつつ歩み行き隣に回覧板を届けぬ

五十嵐夏美

知恵遅き子が死ぬなどと繰り返すに母は元氣と大きく笑ふ

渡部ゆき子

師走には希な大雪一晚に一メートル余ぞ今朝も降り継ぐ

渡部ヨリ子

亡き母の古きミシンを出しければ無心に踏みし背を思ひ出づ

新国 洋子

夫の入院われも病みみて年賀状書けざるままに日が過ぎてゆく

(出 詠 順)

只見俳句会

一月例会

目黒十一 指導

敦子

暮早し宅配の荷の重なりて古戦場金比羅堂も雪五尺

礼

降る雪や途切れ途切れのラジオ音舞うほどの雪美しきかな人送る

信

しんしんと夫婦二人の大晦日豪雪のふるさと想う寒の入

恒夫

角巻の母とおぼしき清の絵助手席に迎えてみたき雪女

修一

格別の笑い声あり大晦日除雪車の音の高さや耳澄す

一灯

数へ日や男の回す洗濯機凍み大根吊す軒先華やげる

邦男

寒の入オリヅランの蔓の伸び菩提寺の庭に差し込む初日かな

又壺歩

元朝や細身に帯の長きこと我が歳を九十二と書く新日記

隆堂

雪搔きに疲れ炬燵に肘枕雪荒れてわずかな視野の峠超ゆ

吉児

上寿まではんなり人生大旦初夢や逢いたき人に逢いにけり

邦夫

奥会津かんじきもある金物屋番鴨楽しそうなる只見ダム

リウコ

派手な服着ても鏡に枯芒診療所混み合う中に風邪の咳

都

暮れの秋赤々燃ゆる阿蘇の夕着ぶかれて手をすり合わせ五十肩

笑羊

母の待つ雪の洞門光りけり“せんべ屋”の光となりし軒氷柱

洋子

暮れ近しふいに飛び立つ鴨の群れドカと雪心残りの事有りて

一穂

感嘆の声の上がりて雪の富士禁煙の部屋を出てきて根雪道

康女

年賀状だけの友あり十四年落雪のつづくや話しフト途絶え

